

高校 2 年生
1 学期中間考查

古典対策

「姥捨」

名前



と詠んで、また（山へ）行って（伯母を）迎えて連れて戻ってきました。それからのち、（この山のことを）姨捨山といいました。慰めがたいというときに（姨捨山を引き合いに出すのは）、これが理由なのでした。

一 信濃の国に更級といふ所に、男住みけり。若き時に親死にければ、をばなむ親のごとくに、若くより添ひ

であるに、この妻の心憂き感心できないこと多くて、この姑の、年老いて腰が曲がる老いかがりてゐたるを常に憎みつつ、男にもこのをば

の御心のさがなく意地が悪い悪しきことを言ひ聞かせければ、昔のごとくにもあらず、疎かにおろかなること多く、このをば

のためになりゆきけり。このをば、いといたう老いて、二重にてゐたり。これをなほ、この嫁、

邪魔にしてところせがりて、今まで死なぬことと思ひて、よからぬことを言ひつつ、「もていまして、深き山に捨て

を

給^てよ。
「とのみ責め^{けれ}ば、責め^{られ}わ^びて、さ^して^むと思ひなりぬ。

が

思い悩む

二月のいと明かき夜、「嫗ども、いざ給へ。寺に尊^きわざ^{なる}、見せ奉ら^む。」と言ひ^{けれ}ば、限りなく

仏事

が

は

喜びて負は^れに^{けり}。高き山のふもとに住み^{けれ}ば、その山にはるばると入りて、高き山の峰の、

が

を

が

下り来^{べく}もあらぬに、置きて逃げて来ぬ。
「やや。」と言へど、いらへもせで、逃げて家に来て

返事

思ひをるに、言ひ腹立てけるをりは、腹立ちてかくしつれど、年ごろ親のごと養ひつつ相添ひにければ、

が

を

は

いと悲しくおぼえけり。

三 この山の上より、月もいと限りなく明かく出でたるをながめて、夜一夜、寝も寝られず、悲しう

が

おぼえければ、かく詠みたりける。

★わが心

なぐさめかねつ

更級や

姨捨山に

照る月を見て

と詠みてなむ、また行きて迎へ持て来に

ける。

それよりのちなむ、姨捨山と言ひける。

なぐさめがたし

を

とは、これが由になむありける。

〔一〕 次の文章は『大和物語』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

信濃国に更級といふ所に、男住みけり。若き時に親は ^a死にければ、をばなむ親のごとくに、若くより添ひてあるに、この妻の心、憂きこと多くて、この姑の老いかがりて ^bゐたるを常に憎みつつ、男にも、このをばの御心のさがなく ^c悪しきことを言ひ聞かせければ、昔のごとくにもあらず、^dおろかなること多く、¹このをばのためになりゆきけり。このをば、いといたう老いて、二重にてゐたり。これをなほ、この嫁、^e所狭がりて、今まで死なぬことと思ひて、よからぬことを言ひつつ、^A「持ていまして、深き山に捨て給ひてよ。」とのみ ^f責めければ、責め ^Bられわびて、²さしてむと思ひなりぬ。

月のいと明かき夜、³「³おぼども、いざ給へ。寺に尊きわざする、見せ奉らむ。」と言ひければ、限りなく喜びて負はれ ^Cにけり。高き山の麓に住みければ、その山にはるばると入りて、高き山の峰の、下り来べくもあら ^Dぬに、置きて逃げて来ぬ。「やや。」と言へど、いらへもせで、逃げて家に来て思ひをるに、言ひ腹立てける折は、腹立ちてかくしつれど、年ごろ親のごと養ひつつ相添ひにければ、いと悲しくおぼえけり。

この山の上より、月もいと限りなく ^g明かく出でたるをながめて、夜一夜、寝も寝 ^Eられず、⁴悲しうおぼえければ、かく詠みたりける、

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

と詠みてなむ、また行きて迎へ持て来にける。それより後なむ、姨捨山といひける。⁵慰め難しとは、これがよしになむありける。

問一 波線部 a ～ g の用言の活用の種類と活用形として当てはまるものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。
ただし、同じ記号を何度用いても構わない。

〈活用の種類〉

ア 四段活用 イ 上二段活用 ウ 下二段活用 エ 上一段活用 オ 下一段活用
カ 変格活用 キ ク活用 ク シク活用 ケ ナリ活用 コ タリ活用

〈活用形〉

ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形 エ 連体形 オ 已然形 カ 命令形

問二 二重傍線部 A ～ E の助動詞の文法的意味と活用形として当てはまるものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を何度用いても構わない。

〈文法的意味〉

ア 受身 イ 使役 ウ 尊敬 エ 打消 オ 推量 カ 意志 キ 過去 ク 完了
ケ 強意 コ 伝聞 サ 推定 シ 断定 ス 可能 セ 当然 ソ 詠嘆

〈活用形〉

ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形 エ 連体形 オ 已然形 カ 命令形

【下書き用】

[illegible]

問五 傍線部 3 とあるが、「すなる」について文法的に説明した次の文の空欄Ⅰ～Ⅳに、当てはまる言葉をそれぞれ答えよ。

I 活用動詞「す」の II 形 + III の助動詞「なり」の IV 形

ア 自分にとってお婆は、幼い頃に親を亡くして以来、長年親代わりとして一緒に過ごしてきた大切な存在だったから
イ 心からお婆を憎んでいたわけではなく、妻に責め立てられて、つい気持ちが動いてしまっただけだから。

ウ 寺でありがたい仏事があるなどという明らかなうそに、容易にだまされてしまう程にお婆は老いて弱っているから。
エ 山の上に置き去りにされると分かってからも、お婆は何一つ不満を口にせず、むしろ自分を思いやつてくれたから。
オ 家に帰ってから物思いにふけて月を眺めていると、幼い頃にお婆が教えてくれた和歌が自然と頭に浮かんだから。

問七 傍線部5とあるが、このように本文の逸話は、後の様々な作品に大きな影響を与えた。次の和歌と、それに関する生徒たちの会話を読んで、空欄に当てはまる言葉を二十五字以内で答えよ。

月も出でで闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ （『更級日記』菅原孝標女）

澁谷君…『更級日記』は、作者である「菅原孝標女」が自身の生涯を振り返り、少女時代から晩年に至るまでの回想を、日記という当時流行の形式で著した作品なんだ。

今井君…右の和歌は、夫を亡くして孤独の身となった晩年のものだよね。

澁谷君…一人寂しく過ごし、悲嘆に暮れていた作者のもとを、甥が訪ねてきてくれた時に詠んだんだよ。

今井君…本文の逸話と重ね合わせると、「月も出でで」という表現からは、
という作者の諦めの気持ちが伝わってくるね。

澁谷君…そんな気持ちで過ごす中で甥が訪ねて来てくれたんだから、よほど嬉しかったんだろうなあ。

今井君…そう考えてみると、『更級日記』という書名も奥深く感じられるよ。



Komaba Tuition Centre
KÖMABA